

令和6年度 第2回学校運営協議会議事録

【日時:場所】

令和6年10月31日(木) 15:00~17:00 運営協議会

中央聴覚支援学校 高等部棟4F会議室

【出席者】

<学校協議会委員>

- ・中瀬 浩一(同志社大学 免許資格課程センター 教授)
- ・良原 恵子(大阪府臨床心理士会 副会長)
- ・前田 浩(大阪ろう難聴就労支援センター 理事長・センター長兼務)
- ・那須 元樹(OSP ハートフル株式会社 代表取締役社長)
- ・堀井 麻記(本校 PTA 会長)

1. 開会

2. 学校長挨拶

3. 実践報告(重点取り組み・高等部進路)

<委員からの主な意見・質問及び回答>

【重点の取り組みについて】

◇重点の一つの「ことばを育む」について、そのあとの取り組みの内容が繋がっていない。テーマと報告内容がずれていると感じた。

◇感覚の言語化、言語の育ち、からもう一つ大事なのが感情の言語化。考えや質問などは自分の中で沸き起こることを整理してことばにすることが大事。何となくおかしいけれど、どのように表現すればいいのか、その表現は1年、2年でどうにかなるわけではない。また聴覚障がい者だけではない課題でもある。

◇使役や受け身などの指導は、指導者がニュアンスの差を理解した上で進める必要がある。

→本校の自立活動プログラムの書記日本語・手話に表現の習得についての項目がある(「状況に合わせて、手話の表現をアレンジする」を校長より示す)。手話表現を磨くという取り組みではあるが、より概念の形成も大事にしていきたい。

【進路の取り組みについて】

◇就労後の会社から「聴覚障がい者の人は質問をしないのか?」とよく言われる。会社側から伝えたことが伝わっているのかわからない。質問することが恥ずかしい、きいてないと思われたくないというような気持ちもあるかもしれない。子どもにとってわかる授業を進めると、配慮をした上で進めることになるので質問の機会(必要性)が少なくなる。質問やきくことが悪いことではないと伝えていくことが必要である。わからないことがわからないと伝えられることが大事。

→高等部の進路の実習ではわからないまま進めないように伝えている。会社にも自分にも不利益になるということ伝えて実習に臨んでいる。

◇小さいころからわからないことをきくという関係性を作る必要もある。就職指導がきっかけではない。質問する力がとっても大切だと思う。

◇聴覚障がい者との関わりでよくあるのは協議や検討というプロセスに入らず結果のところだけやってもらうことが多い。プロセスに関わる経験が大事。

◇実習では作業系と決めていても事務系をしたほうがよい。事務がよいといっている作業系の経験は必要。なぜなら適性のこともあるので、一つに絞って実際進路を決めるときに合わない凝り固まってしまう。段階的に絞っていくほうが良いのでは。できるだけいろんな実習を入れることで、経験だけでなくビジネスマナーにもつながる。

◇キャリアパスポートについて幼稚部からのスパイラルだと思うが、報告では高等部だけになっている。幼稚部からの流れがあって、最終的に高等部の進路決定や小さい時からの課題や活動がどうつながっているのか状況を教えてもらいたい。

◇飲食関係の仕事を希望していた高等部の生徒の例で、1年次、2年次ともに飲食関係の実習を行ったが、マスク、筆談が必要となり、コミュニケーション面で飲食関係をあきらめた。飲食関係以外の進路を考えたが、筆談等でのコミュニケーションが必要な環境では不安もある。手話のできる環境が安心につながる生徒もいる。

4. 議事

①令和6年度学校経営計画 中間報告について 校長より説明

<委員からの主な意見・質問及び回答>

◇いじめのアンケートについては前回からいろいろな試みが増えたと思っている。月初めにいじめ対応委員会を開いているようだが、議事録はとっているか。また、アンケートは年に2回やっているが、最近は年に3回(学期に1回)の学校が増えた。2回目後に間が開くので3学期に一回入れるのがよいかと思う。

◇教員よりも友だちの評価(友だちの目)を気にしてアンケートを書かない生徒もいる。生活のアンケートも入れながら、みんなが書けるような工夫が必要。

→校内委員会のあとにいじめ対応委員会を行い、議事録もとっている。その他、状況に応じて委員会を開きながら教員が危機感を持ち、情報共有をしながら進めている。生活アンケートの内容はいじめに関する内容だけではなく、答えやすい内容を入れているが、今後も工夫していきたい。

◇事前に役割を決めない避難訓練は事前に子どもに伝えていないのか。また、避難後の点呼の方法はどのようにしているか。

→訓練の日は子どもに事前に伝えていますが、今年度は訓練の時間を伝えず、休み時間の訓練を行った。点呼については、生徒と教員の名簿を作成し、緊急時に持ち出せるようにしている。

◇社会に出たときに必要になるのが文章の読み取りだと思う。きこえる人はわからないときに質問ができるが、聴覚障がい者は質問しづらい状況があるので、生活の中で必要な力をつける必要がある。

◇社会見学は企業などの見学があるのか。地域などとの交流が書かれているが、工場の見学や資料館やモノづくりなどの見学をしているのか。

→昔は工場にも見学に行っていたが、去年はJALや作業所に行くこともあった。消防署や警察にも行っている。

◇聴覚支援学校の中高生の将来なりたい職業に先生が増えてきている。実際、聴覚障がいのある先生がいてロールモデルになっている。逆に言えばそれ以外の聴覚障がいの人が働いている仕事を知る機会が少ないのでは。

子どもたちには実際にきこえない人が働いている仕事を見に行くことも大切。

→本校ではろうあ会館への見学や中学部ではロールモデル講演会なども開いている。

◇ある記念館では聴覚障がい者が働いていて全部手話で説明をしてくれて、取り組みが素晴らしいと感じた。

きこえない方にすれば情報を取り入れる機会が少ないので、このような取り組みをすることで、子どもたちが外に出る機会にもつながるのかなと感じた。

◆議事①令和6年度学校経営計画 中間報告について承認された

5. 事務局より

6. 閉会(校長より)

◇「わかる授業を進めるほど質問の機会が減っている」ということを今の学習の在り方と合わせて、ご意見をいただいた。現在の学習指導要領では、「主体的・対話的・深い学び」と、学びをより深く探究することである。ていねいな授業をしたうえで、児童生徒が目目のことに対する疑問感を持てるような活動になればよいかと感じている。